のの

The Last Leaf

オー・ヘンリー

ワシントン・スクエアにあるは、がったようにりんでおり、 「プレース」とばれるにさくかれておりました。 この「プレース」はなとをいており、、としているりがあるほどでした。 かつて、あるは、このりがなをっていることをしました。えばややキャンバスのをにしたりてをえてみてください。りては、このをきったあげく、 ぐるりとのところまでってくるにいありません。セントもりてることができずにね。

それで、たちはまもなく、でいグリニッチ・ヴィレッジへとやってきました。 そして、きのとのりとオランダのといをしてうろついたのです。 やがて、らは しろめのマグやこんろきなべを、、からちみ、 「コロニー」をすることになりました。

ずんぐりしたてのりのでは、スーとジョンジーがアトリエをっていました。 「ジョンジー」はジョアンナのです。 スーはメインの、ジョンジーはカリフォルニアのでした。はの「デルモニコの」のでい、と、チコリーのサラダと、ビショップ・スリーブのがぴったりだとわかって、のアトリエをつことになったのでした。

それがのことでした。にると、たく、にえないよそがそのコロニーをりきはじめました。 そのよそはからとばれ、のようなでそこかしこにいるにれていくのでした。 このはのからにきまわり、ものにいかかりました。 しかし、くてむした「プレース」のをるときにはさすがののりもりました。

はにちたとはべませんでした。がく、にまみれたをったりのエセが、 カリフォルニアのそよでののくなっているなをにるなどというのは フェアプレイとはえますまい。 しかしはジョンジーをいました。 そのジョンジーはれ、のがいてあるのベッドにになったまましもけなくなりました。 そしてさなオランダのガラスごしに、にあるりののもないをつめつづけることになったのです。

ある、のいをしたながスーをにびました。

「かるみは ―― そう、につですな」は、のをりげながらいました。 「で、そのみはあのが『きたい』とうかどうかにかかっている。 こんなにのにつこうとしてたら、どんなでもばかばかしいものになってしまう。 あのおさんは、はよくならない、とめている。 あのがかにかけていることはあるかな？」

「あのは ―― いつかナポリをきたいってってたんです」とスーはいました。

「をきたいって？ ―― ふむ。 もっとくらいのあることはえていないのかな ――えばのこととか」

「？」スーは びあぼんののみたいなでいました。 「なんて ―― いえ、ないです。。そういうはありません」

「ふむ。じゃあそこがネックだな」はいました。 「わたしは、ののおよぶりのこと、ができることはすべてやるつもりだ。 でもな、がのにるのをえめたら、のきもなんだよ。 もしもあなたがジョンジーに、にはどんなのがるのか、 なんてをさせることができるなら、みはにつからにつになるってけうんだがね」

がると、スーはにってのナフキンがぐしゃぐしゃになるまできました。 やがてスーはスケッチブックをち、でラグタイムをきつつ、をってジョンジーのにっていきました。

ジョンジーはシーツをかけてになっていました。 しわつもシーツにせることなく、はにけたままでした。 ジョンジーがっているとい、スーはをやめました。

スーはスケッチブックをセットすると、のをペンとインクできはじめました。いはのをりくためにをきます。きはのをりくためにそのをかなければならないのです。

スーが、なのショーのズボンとをのアイダホカウボーイのためにいているとき、いがりしてこえました。 スーはいでベッドのそばにきました。

ジョンジーはをきくいていました。 そしてのをながらをえて ――にをえているのでした。

「じゅうに」とジョンジーはい、しに「じゅういち」といました。 それから「じゅう」「く」とい、それから「はち」と「なな」をほとんどにいました。

スーはいぶかしげにのをました。をえているのだろう？　そこにはもなく わびしいがえるだけで、ののもないはフィートもこうなのです。がだらけでりかかっている、 とても、とてもいつたがそのののほどまでっていました。たいのは つたのにきけて、 もうとなったはれかかったにしがみついているのでした。

「なあに？」スーはねました。

「ろく」とジョンジーはささやくようなでいました。 「くちてくるようになったわ。はくらいあったのよ。えているとがくなるほどだったわ。 でもいまは。 ほらまた。もうっているのはだけね」

「がなの？　スーちゃんにえてちょうだい」

「っぱよ。つたのっぱ。のがるとき、わたしもにくのよ。からわかっていたの。 おさんはえてくれなかったの？」

「まあ、そんななはいたことがないわよ」スーはとんでもないとをいました。 「いつたのっぱと、あなたがになるのと、 どんながあるっていうの？　あなたは、あのつたをとてもきだったじゃない、おばかさん。 そんなしょうもないことわないでちょうだい。 あのね、おさんは、あなたがすぐによくなるみは ―― えっと、 おさんがったとおりのでえば ―― 「にだ」ってうのよ。 それって、ニューヨークでにるとか、のビルのそばをるぐらいしかなくないってことよ。 ほらほら、スープをしんで。 そしてこのスーちゃんをスケッチにらせてね。 そしたらスーちゃんはにスケッチをってね、のベビーにはポートワインをってね、 はらぺこのにはポークチョップをえるでしょ」

「もう、ワインはわなくていいわ」はのにけたまま、ジョンジーはいました。 「ほらまた。ええ、もう、スープもいらないの。りのは たったの。くなるにのがるのをたいな。そしてもさよならね」

「ジョンジー、ねえ」スーはジョンジーのにかがみんでいました。 「おいだからをじて、のがわるまでのをないってしてくれない？　このは、までにさなきゃいけないのよ。くのにかりがいるの。 でなきゃよけをろしてしまうんだけど」

「のではけないの？」とジョンジーはたくねました。

「あなたのそばにいたいのよ」とスーはえました。 「それに、あんなつたのっぱなんかてほしくないの」

「わったらすぐにえてね」とジョンジーはい、をじ、れたのようにいをしてじっとになりました。 「のがるのをたいの。もうつのはれたし。えるのにもれたし。がぎゅっとりめていたものすべてをしたいの。 そしてひらひらひらっときたいのよ。 あのれで、れたのみたいに」

「もうおやすみなさい」とスーはいました。 「ベーアマンさんのところまでって、いたののモデルをしてもらわなくっちゃいけないの。 すぐにってくるわ。ってくるまでいちゃだめよ」

ベーアマンはスーたちののにんでいるでした。はしていて、 ミケランジェロのモーセのあごひげが、 カールしつつのサチュロスのからのへれがっているというです。 ベーアマンはにはでした。、をふるってきましたが、のののすそにれることすらできませんでした。をものするんだといつもっていましたが、 いまだかつてをつけたことすらありません。 ここは、ときおりやにうへたなには まったくもいていませんでした。 ときどき、 プロのモデルをうことのできないコロニーのいのためにモデルになり、 わずかばかりのぎをていたのです。 ジンをがぶがぶのみ、これからくについてでもるのでした。 ジンをんでいないときは、ベーアマンはむずかしいなで、であれ、なにしてはひどくあざい、のことを、にむきのをるなマスチフのだとっておりました。

ベーアマンはジンのジュニパーベリーのりをぷんぷんさせて、のいにおりました。にはもかれていないキャンバスがにっており、もの、ののがろされるのをっていました。 スーはジョンジーのをベーアマンにしました。 このにするジョンジーのがさらにくなったら、がのののようにくもろく、 はらはらとってしまうのではないか…。 スーはそんなれもベーアマンにしました。

ベーアマンは、いをうるませつつ、 そんなばかばかしいに、とのをげたのです。

「なんだら！」とベーアマンはびました。 「いったいぜんたい、っぱが、けしからん つたからるからぬなんたら、ばかなことえているがいるのか。 そんなのはいたこともないぞ。 あほののろまのモデールなんかやらんぞ。でらそんなんたらつまらんことをあののあたまにえさせるんだら。 あのかわいそうなかわいいヨーンジーに」

「がひどくて、もっているのよ」とスーはいました。 「のせいで、ちがちんでて、おかしなえでがいっぱいなのよ。 えーえ、いいわよベーアマンさん。もしものためにモデルになってくれないなら、しなくてよ。 でも、あなたはいやないぼれの ――いぼれのコンコンチキだわ」

「あんたもってわけだ」とベーアマンはびました。 「モデールにならんとがったらんか。いいかね。 あんたとにくったらさ。 モーデルのはできてると、もの、おうとしたったらさ。 ゴット！　ここは、 ヨーンジーさんみたいななおさんがでむところじゃないったら。 いつか、わしがをいたらって、 わしらはみんなここをていくんだら。 ゴット！　そうなんだら」

のにいたとき、ジョンジーはっていました。 スーはよけをのしきいまでっりおろし、ベーアマンをのへびました。 そこではびくびくしながらののつたをつめました。 そしてもをさず、しばししてをわせました。 ひっきりなしにたいがりき、みぞれまじりになっていました。 ベーアマンはいシャツをて、 ひっくりしたなべをにたて、のとしてりました。

の、ねむったスーがをますと、 ジョンジーはどろんとしたをきくいて、ろされたのよけをつめていました。

「よけをあげて。たいの」ジョンジーはささやくようにじました。

スーはしぶしぶいました。

けれども、ああ、ちけるとしいがいのれったというのに、 つたのが、のにっておりました。 それは、ののでした。のつけねはいで、 ぎざぎざのへりはがかっておりました。 そのはにもフィートほどのさのにっているのでした。

「これがのね」ジョンジーがいました。 「のうちにるとっていたんだけど。のがこえていたのにね。 でも、あのはる。に、もぬ」

「ねえ、おいだから」スーはれたをのにづけていました。 「のことをえないっていうなら、せめてのことをえて。はどうしたらいいの？」

でも、ジョンジーはえませんでした。にちたいちへのをしているこそ、 このでもなものなのです。というがジョンジーをくとらえるにつれ、やとのきずなはくなっていくようでした。

がぎ、たそがれどきになっても、 たったった つたのは、をはうにしがみついておりました。 やがて、がるとともにがびきたれる、はをちけ、いオランダのひさしからはがぼたぼたとちていきました。

がてるくなると、ジョンジーはにも、よけをげるようにとじました。

つたのは、まだそこにありました。

ジョンジーはになったまま、いことそのをていました。 やがて、スーをびました。 スーはチキンスープをガスストーブにかけてかきぜているところでした。

「わたしは、とてもいだったわ、スーちゃん」とジョンジーはいました。 「かが、あののをらないようにして、 わたしがていことをっていたかえてくれたのね。にたいとうのは、なんだわ。 ねえ、スープをしってきて、それからにワインをしれたミルクも、それから ―― ちがうわ、 まずをってきて。それからをかのろにしんで。 そしたらをこして、あなたがするのがられるから」

それからたって、ジョンジーはこういました。

「スーちゃん。わたし、いつか、ナポリをきたいのよ」

にあのがやってきました。り、スーもにました。

「だ」とはスーのくえているをとっていました。 「よくすればあなたのちになる。 これからわたしはのにいるのをなければならん。 ベーアマンとったな ――、なんだろうな。 このもなんだ。 もうだし、もっているし、だし。のは、からんだろう。 だが、にって、もうしになるだろう」

の、はスーにいました。 「もうはない。あなたのちだ。あとなのはと―― それだけだよ」

その、スーはベッドのところにました。ジョンジーはそこでになっており、 とてもくてくじゃないウールのショルダースカーフをげにんでおりました。 スーは、ももかもまとめてきかかえるようにをしました。

「ちょっとしたいことがあるのよ、ねずみちゃん」とスーはいました。 「、ベーアマンさんがでのためおくなりになったの。はたっただけだったわ。の、ののでみのためどうしようもないになっているのをさんがつけたんですって。ももぐっしょりれていて、みたいにたくなっていたそうよ。 あんなひどいにいったいどこにってたのか、 はじめはもできなかったみたいだけど、 まだかりのついたランタンがつかって、 それから、のからきずりされたはしごがつかったのよ。 それから、らばっていたと、とがぜられたパレットも。 それから、 ―― ねえ、のをてごらんなさい。あののところ、ののつたのをて。 どうして、あの、がいてもひらひらかないのか、にわない？　ああ、ジョンジー、 あれがベーアマンさんのなのよ ―― あのは、ベーアマンさんがいたものなのよ。ののがったに」